

米大使館エルサレム移転と福音派の 黙示的終末論

船 津 靖

はじめに

序 章 聖書と外交

第1章 米大使館の聖地移転強行

第2章 福音派シオニストの教会

第3章 黙示的前千年王国終末論

おわりに

註・参考文献・英文要旨

は じ め に

ドナルド・トランプ米大統領は2017年12月、在イスラエル・アメリカ大使館を地中海岸のテルアビブから山間の聖地エルサレムへ移転すると発表した。米大使館の聖地移転には数年を要するとの見方もある中、トランプ政権は翌2018年5月にエルサレムで新大使館の開館式典を行った。アメリカの中東外交史上、異例の親イスラエル政策である。

トランプ政権の親イスラエル政策は、アメリカの有権者の約4人に1人と推定されるキリスト教福音派の存在を強く意識したものだ。福音派の多くは宗教上の理由からイスラエルの右派政権を支持する。トランプ政権に限らず超大国アメリカの外交・安全保障政策には、国際社会の合意や規範よりも聖書の逐字的、預言的解釈を重視する福音派が大きな影響を与えてきた。

福音派は「神による人類の救済計画」におけるユダヤ教徒の役割を重視する。20世紀半ばのユダヤ国家イスラエル建国を聖書の「ユダヤ教徒の聖地再定住」に重ねる。イスラエル国家を支持することが「(古い)世界の終わり」や「救世主(メシア)イエスの再臨」,「神が支配する(千年)王国」

の到来に貢献すると考える。福音派の中で、イスラエル占領下に生きるパレスチナ人の窮状に視線が届く人は少数だ。

本稿は序章「聖書と外交」で福音派の親イスラエル思想を概観する。第1章「米大使館の聖地移転強行」と第2章「福音派シオニストの教会」は報道記事や資料に基づき、私の取材経験も交えた。第3章「黙示的前千年王国終末論」では福音派の指導的牧師や作家、テレヴァンジェリスト（テレビ伝道師）の多くに共通するキリスト教シオニズムの起源や系譜について略述した。

日本のキリスト教徒は人口の2%に満たず、世界的には例外的と言えるほど少ない。一般読者がキリスト教シオニズムを理解するのは容易ではないだろう。新聞やテレビでトランプ大統領支持の福音派に触れる場合も、ごく簡単に済ませるのが通例だ。取材・報道する記者の側にも福音派の深い知識を持つ者が多いとは言えない。私はエルサレムやニューヨークに住んで取材し、エルサレムではキリスト教シオニズムの流れを汲む英国系国際学校に娘2人を通わせ、学校行事にも参加するなど多少の関わりを持った。しかし福音派の神学は難解で、福音派とユダヤ教徒の関係は、ユダヤ教徒の改宗を密かに目指す福音派の宣教問題も絡んで複雑だ。アメリカの中東外交への福音派の影響に深く立ち入るのは、長年ためらってきた。

現代アメリカの福音派には「デイスベンセーション主義」と呼ばれる19世紀英国起源の独特の黙示的終末論が影響している。イスラエルを舞台とする終末論や千年王国論は、隣人愛をはじめとするキリスト教の倫理的側面と比べて、日本ではあまり知られていない。雲に乗った救世主イエスの再臨、イエスと敬虔なキリスト教徒との空中での至福の出会い（ラブチャー）、死者の復活、善と悪の最終決戦（ハルマゲドン）などは映画かゲームの世界の荒唐無稽な物語と感じられるかもしれない。

だが、不正義に満ち腐敗したこの世界がまもなく「終わりの日」を迎え、「神の王国」が到来するという聖書預言への信仰は、愛の教えと共に、キリスト教思想の2本の柱だ。思想をその内容と別に、生成のプロセスや構造、

社会的機能から見た場合、マルクス・レーニン主義を含むさまざまな革命主義的、理想主義的な政治思想にも、黙示的終末論との類似性を見出すことができる。千年王国願望は、この世で苦難にある人々の心に見いだすことのできる社会心理現象と言えよう。

序章 聖書と外交

政治的シオニズム

地中海岸にあるイスラエルの都市テルアビブは「春の丘」という意味のヘブライ語だ。ロシア帝国や東ヨーロッパなどから移民してきたユダヤ人のシオニストが1909年に礎を築いた¹⁾。シオニストとは、古代ユダヤ民族の失われた故郷である中東のパレスチナにユダヤ民族国家を再建することを目指した政治活動家だ。ユダヤ民族は当時の超大国ローマに故国を滅ぼされ、地中海世界各地に離散した。ユダヤ人はユダヤ教信仰をアイデンティティの中核とする。ユダヤ教起源のカルト宗教だったキリスト教がローマ帝国の中で勢力を増し、帝国の公認宗教（313年、コンスタンティヌス帝のミラノ勅令）、国教（392年、テオドシウス帝の異教禁止）となるのに伴い、ユダヤ教徒は預言者イエスを拒み十字架刑を求めた異教の民として、西洋キリスト教社会で長く差別や迫害を受けるようになった。

シオニストという名前は、古代ユダヤ教の聖地エルサレムにあるシオン山に由来する。シオニズムという言葉には、故国を追われ散り散りになったユダヤ民族が、失われたはるかな聖都エルサレムに向けて祈る望郷の心情が込められている。

シオニストの指導者たちは19世紀後半、流浪の民の悲惨な歴史に終止符を打とうと決意し、当時勃興した民族自決のナショナリズムを自らにあてはめ、ユダヤ人の国民国家（nation state）を創設する目標を掲げた。ユダヤ人多数が居住するロシア帝国やオーストリア＝ハンガリー帝国では政治や社会の混乱が深まっていた。16世紀以来パレスチナを支配するオスマン帝国は解体過程にあった。ウィーン出身のジャーナリスト、テオドール・

ヘルツルはパリ特派員として、フランスでユダヤ系のエリート軍人が対独スパイ事件の冤罪で裁判にかけられたドレフュス事件取材し、西欧啓蒙主義の最先進国における反ユダヤ主義の根深さに衝撃を受けた。ヘルツルは『ユダヤ国家』（1896年）を出版し、1897年にはスイスのバーゼルで世界シオニスト会議を開催して政治的シオニズム（political Zionism）を現実的な政治運動として主導した。

ヘルツルはユダヤ民族国家の領土として必ずしもパレスチナに固執してはおらず、一時はシナイ半島や南米、ウガンダの名前も挙がった。だがイスラエルの初代首相となるダヴィド・ベングリオンはじめヘルツル後のシオニスト主流派は、聖書の民ユダヤ人の故郷パレスチナに狙いを定めた。ユダヤ人国家樹立という野心的な計画を実現するには、ロシア・ヨーロッパ諸国やアメリカなど世界各地に離散するユダヤ人の心を深層から揺さぶる「聖地パレスチナにユダヤ国家再建」という悲願を掲げ、世俗的なユダヤ人の心にも綿々と流れる伝統的な民族感情に訴えて、民族のパトス（情熱）に点火するほかない、と判断した²⁾。

シオニスト主流派には社会主義的な労働組合運動の出身者が多かった。ベングリオンはじめユダヤ教聖書（旧約聖書、ヘブライ語聖書）の深い知識を持つ者もいたが、基本的には非宗教的、世俗的な政治的リアリスト集団だった。シオニスト主流派は、オスマン帝国領パレスチナへのユダヤ移民・植民を推進しユダヤ国家の基盤となる既成事実をつくることに全力を挙げた。外交交渉では国際社会のパワー・ポリティクスでカギを握る大英帝国やアメリカなど大国の指導者層に巧妙に接近していった。この過程で「ユダヤ教徒の聖地再定住」（the restoration of the Jew）を主に宗教的理由から支持する英米指導層のキリスト教シオニズム（Christian Zionism）が好都合だった。パレスチナにおけるユダヤ民族郷土（national home）建設への大英帝国の支持を公式に打ち出した1917年のバルフォア宣言は、キリスト教シオニストのアーサー・バルフォア外相がユダヤ系大富豪ウォルター・ロスチャイルドに宛てた書簡で表明された。

ユダヤ人シオニストの民族国家樹立の目標は当初、夢想的にすら見えたが、実現への手法は国際社会の権力政治の現実を踏まえていた。19世紀から20世紀前半のロシアや東欧では、黒装束と長いもみあげが目立つユダヤ教神秘主義のハシディズム（Hasidism）を信仰するユダヤ教徒の庶民が多かった。一方、シオニスト主流派は目的合理的に思考し行動する實際家だった。かれらは、聖地に向け神に祈る敬虔なユダヤ教徒のシオニストと区別して政治的シオニストと呼ばれている。

国連安保理決議違反

在イスラエルのアメリカ大使館はテルアビブの高級ホテルが立ち並ぶ地中海のビーチ沿いに、巨大な要塞のようにそびえ立っていた。トランプ米大統領は2017年12月6日、アメリカ大統領として初めてイスラエルの首都はエルサレム³⁾であると承認した。さらに、テルアビブの米大使館を約70キロ離れたエルサレムに移転すると発表し、世界を驚かせた。エルサレムに大使館を置く国はなかった。

エルサレム市の通称「東エルサレム」旧市街にはユダヤ教、キリスト教、イスラーム教という三つの一神教の聖地が集中する。ユダヤ教徒の嘆きの壁（西の壁）、キリスト教徒の聖墳墓教会、イスラーム教徒の岩のドーム（黄金のドーム）やアルアクサー・モスクである。一神教の信徒は世界人口の半数を優に超え、中国人と日本人を除けば人類のざっと3人に2人が一神教の信徒かその文化圏で生きる人々だ。数ある国際紛争の中でパレスチナ紛争が長年、特権的とも思える関心を集めてきた一因である。東エルサレムには主にパレスチナ・アラブ人のイスラーム教徒やキリスト教徒が住んでいた。イスラエルは1967年の第三次中東戦争で、東エルサレムを実効支配していたヨルダンから攻撃されたのを奇貨とし、反撃して東エルサレムを占領し、直ちにユダヤ地区の西エルサレムに併合した。

イスラエルの右派政党リクードのベギン首相は1980年、この「統一エルサレム」を正式にイスラエルの首都とする「基本法」を制定した。国連安

全保障理事会はこの法律を無効とする決議478を反対ゼロで採択し、国連加盟国に外交使節をエルサレムに置かないよう求めた。アメリカのカーター民主党政権も常任理事国の特権である拒否権を行使できずに棄権した。安保理決議を受け、当時エルサレムに大使館を置いていた13カ国は大使館を地中海岸のテルアビブに移転していった。

トランプ大統領による米大使館のエルサレム移転決定は、この安保理決議に明白に違反している。トランプ政権の「アメリカ・ファースト」外交の特徴である国際規範軽視の典型的な事例だ。野党民主党は、中東和平交渉の公平な仲介者を期待されてきた歴代米大統領の立場を損なう、と批判した。

福音派の親イスラエル思想

トランプ共和党政権の米大使館エルサレム移転声明は、共和党政権を含む歴代米大統領の中東政策から逸脱していた。異例の親イスラエル政策はこれにとどまらない。トランプ政権は2018年5月の大使館移転直前に、イスラエルが安全保障上の最大の脅威とみなすイランと国連安保理常任理事国5カ国やドイツとのいわゆる「イラン核合意」からの離脱を一方的に宣言し、対イラン経済制裁を復活させていった。

2019年3月25日には、シリア領ゴラン高原のイスラエル主権を承認した。ゴラン高原はイスラエルが1967年の第三次中東戦争で占領し、1981年に一方的に併合を宣言したが、国連安全保障理事会はこれを無効とする決議497をレーガン共和党政権のアメリカを含む全会一致で採択している。軍事占領地の併合承認は第二次世界大戦後の国際秩序の基盤を揺るがすものだ。

2019年11月にはマイク・ポンペオ米務長官が、イスラエル占領地ヨルダン川西岸地区のユダヤ人の入植活動について「国際法違反ではない」と発言し、国際社会の強い批判を意に介さない姿勢を鮮明にした。キリスト教福音派として知られるポンペオ長官は2020年11月の大統領選後、占領地ヨルダン川西岸のユダヤ入植地とゴラン高原を訪問した。ポンペオ長官は

2024年米大統領選に福音派の支持をあてにして出馬する可能性も一部で取りざたされた。

トランプ政権の露骨な親イスラエル右派政策は、白人キリスト教福音派（White Christian Evangelicals）を支持基盤とするトランプ大統領の再選戦略に沿ったものだ。福音派にはユダヤ教徒の聖地再定住を聖書の預言的解釈に基づき待望するキリスト教シオニズムが広く浸透している。福音派の大多数は、聖書の物語を現代に合わせて理性的・象徴的に解釈するのではなく、救世主イエスの再臨（the Second Coming）やイエスが支配する「千年王国」（the Millennium）の到来といった聖書預言を文字通りに受け入れる傾向が強い。

世論調査機関ピュー・リサーチ・センター（the Pew research Center）が2014年に実施した宗教状況調査（Religious Landscape Study）によると、アメリカの成人の25.4%（2007年は26.3%）、ほぼ4人に1人が自らをキリスト教福音派とみなしていた。6,000万人を超える一大勢力である。民主党支持層に多いメインラインと呼ばれるプロテスタント主流派の14.7%（2007年は18.1%）の倍近くに達する。カトリックの20.8%（2007年は23.9%）を上回る。大統領選挙の帰趨を決める重要な宗教集団だ。

トランプ大統領は2016年7月、敬虔なキリスト教福音派として有名な中西部インディアナ州のマイク・ペンス知事を副大統領候補に選んだ。ペンス氏は、品行が疑われるトランプ氏より福音派の信頼が厚かった。福音派の票を当て込んでの抜擢だ⁴⁾。トランプ大統領は2017年5月22日、最初の外遊先サウジアラビアに続いてイスラエルを訪問した。東エルサレム旧市街にあるイエス・キリストの十字架の受難と復活の場とされる聖墳墓教会を訪れ、現職のアメリカ大統領として初めてユダヤ教聖地「嘆きの壁」で祈りをささげた。

約束の地，終末論

聖書を言葉通り逐字的に解釈するキリスト教福音派は、イエスの十字架

刑と復活の舞台である聖地エルサレムをはじめユダヤ教徒の故郷イスラエルの地（エレッ・イスラエル）を崇める。旧約聖書の『創世記』15章「アブラムとの契約」18節、

「あなたの子孫にこの地を与える。エジプトの川からあの大河ユーフラテスに至るまでの（後略）」

などに基づき、カナン地方（現在のイスラエル／パレスチナ）とその近隣は神ヤハウェからイスラエルの民への「約束の地」（the Promised Land）とされ、「乳と蜜の流れる地」（land of milk and honey, 『出エジプト記』3章8節など）とうたわれる⁵⁾。福音派の中でユダヤ国家イスラエルの建国を支持し、1948年の建国後はイスラエルへの支援を強く訴えるキリスト教シオニストは『創世記』12章「アブラム、カナンに入る」の1－3節、

「主はアブラムに言われた。（中略）。あなたを祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う人を私は呪う」

などに基づき、アメリカがイスラエルを支援すればアメリカも神に祝福され、イスラエルを蔑ろにすればアメリカも神に呪われる、と考える。トランプ政権の米大使館エルサレム移転は、キリスト教シオニストの指導者や組織・団体によるアメリカ連邦議会とホワイトハウスへの長年の働きかけの成果だ。

著名なキリスト教シオニストには旧約の黙示文書『ダニエル書』や新約聖書の『ヨハネの黙示録』などの終末預言を独自に解釈し、イエスの再臨に始まる「世界の終わり」に反キリスト（Antichrist）の支配や善と悪の最終戦争ハルマゲドン（The Battel of Armageddon）が戦われ、勝利したイエス・キリストが支配する千年王国が到来する、という終末論（eschatology）を説く人が多い。

この黙示的終末論は空想的な物語に聞こえるが、万有引力の法則を発見し力学や微積分学の基礎を築いたイギリスの物理学者・数学者アイザック・ニュートン（1642-1727）は、主著『プリンピキア 自然哲学の数学的原理』に加えて『ダニエルの預言と聖ヨハネの黙示録に関する考察』の執筆にも心血を注いだ。西洋近代科学と聖書の黙示思想（Apocalypticism）の絡み合いを示す一例だ⁶⁾。

第1章 米大使館の聖地移転強行

公約実行をアピール

トランプ米大統領はホワイトハウスで2017年12月6日、エルサレムをイスラエルの首都だと正式に承認し、アメリカ大使館をエルサレムに移転すると演説した際、「明白なことを承認した」「現実の承認以上でも以下でもない」と述べ、「これまでの大統領はこのことを選挙の主要な公約に掲げておきながら、実行し損ねてきた。本日、わたしは公約を実行した」と実行力を強調した。この発言は、共和党主導の米連邦議会が1995年に採択した「エルサレム大使館法」が移転を義務付けていたのに、クリントン、ブッシュ（子）、オバマの歴代大統領が同法適用の繰り延べ措置を取り続けてきたことを指している⁷⁾。

イスラエルのイツハク・ラビン首相とパレスチナ解放機構（PLO）のヤセル・アラファト議長が1993年9月13日、ホワイトハウスでクリントン米大統領の仲介によって署名したパレスチナ暫定自治宣言（オスロ合意）は、エルサレムの恒久的（最終的）地位について、紛争当事者のイスラエルとパレスチナ自治政府が和平交渉で決める、と定めた。自治政府は、イスラエルが1967年に占領したヨルダン川西岸地区とガザ地区を領域とし、東エルサレムを首都とするパレスチナ独立国家の樹立を悲願としている。アラファト議長の2004年の死後に自治政府議長となったマフムード・アッバス議長もこの目標を引き継いでいる。

クリントン大統領以降の米大統領候補は、ユダヤ系アメリカ人億万長者

からの巨額政治献金やキリスト教福音派の大票田をあてこんで、選挙戦の最中は米大使館のエルサレム移転を公約してきたが、大統領に当選し就任すると、中東和平を仲介するアメリカの外交的立場や国益を損なうとの判断から、民主・共和の党派の違いを超えて公約の実施を見送って来た。

再選戦略を重視するトランプ大統領は、アメリカ外交のタブーを破って親イスラエル右派外交へ大きく舵を切った。福音派やユダヤ系右派にアピールするのが目的である。アッバス自治政府議長は「アメリカは和平交渉の信頼できる仲介者としての地位を失った」と述べ、米仲介の和平交渉への参加を拒否した。アッバス議長は、対イスラエル和平に反対し、自爆テロで人気を集めたイスラーム主義組織ハマスと対立してきた。イスラエルとパレスチナの「2国家共存案」による和平達成を目指してきたが、占領地の入植地拡大を続けるネタニヤフ右派政権の強硬策と、同政権を露骨に支持するトランプ政権の登場で、苦しい立場に立たされている。

エルサレム南部アルノナ地区に新大使館がオープンした2018年5月14日にホワイトハウスが発表した声明のタイトルは「トランプ大統領、大使館開館の公約を守る」だった。声明は過去の米大統領が公約を反故にしてきたと指摘し、トルーマン大統領が1948年5月14日、世界に先駆けイスラエル独立宣言を承認したちょうど70年目のイスラエル独立記念日に米大使館をエルサレムに移転した意義を強調した⁸⁾。

パレスチナ孤立化

声明は「エルサレムをイスラエルの首都と承認するのは和平実現の必要条件」「最終地位交渉での米政府の立場を示すものではない」と述べる一方、パレスチナ側に言及しなかった⁹⁾。翌5月15日は、パレスチナの民族的悲劇「ナクバ（大惨事）」の記念日だった。1948年のイスラエル建国で70万人以上のパレスチナ・アラブ人が故郷を追われ、ヨルダン川西岸やガザ地区、近隣のヨルダン、レバノン、シリア、エジプトなどアラブ諸国に難民となって逃れた。ハマスが実効支配するガザ地区では、2018年3月末から反

イスラエル抗議デモが始まり、イスラエル軍と衝突を繰り返した。ハマス指導部の呼びかけで、イスラエル領との境界に張り巡らされているフェンスにガザの住民が押しかけ、イスラエル軍部隊は催涙ガスやゴム弾で銃撃した。ニューヨーク・タイムズ紙によると、6週間で2,000人以上が負傷し50人以上が死亡した。ハマスの指導部は衝突とガザ住民の犠牲が米CNNテレビや英BBC放送、カタールの衛星放送アルジャジーラの映像などで世界に報道されることで、反イスラエル、反アメリカの国際世論が沸き起こることを狙ったとみられる。

だが、ナクバ記念日の抗議行動は数百人規模と低調に終わった。イスラエル・メディアなどの報道では、ハマ스에影響力を持つエジプトとカタールが水面下でイスラエル治安当局との停戦交渉を仲介した。ハマスは14日、住民が境界フェンスに押し掛けるようスピーカーで呼びかけ、バスを用意したが、15日には取りやめた。

背景には、パレスチナの反イスラエル闘争に対するアラブ諸国はじめ国際社会からの注目度の低下があった。イスラエルの占領に反対しパレスチナを支援する「アラブの大義」は揺らいでいた。イスラーム教シーア派の地域大国イランの核兵器開発疑惑やイランによる各地のシーア派系武装組織への支援によって、中東諸国の対立軸は「アラブ・イスラエル紛争」からイスラーム諸国内の「スンニ派對シーア派」に移行していた。イランを脅威とみなすスンニ派アラブ諸国の盟主サウジアラビアは親米の産油大国で、米国製兵器の大口顧客でもある。イラン敵視、親米、米軍との密接な関係などで、サウジアラビアとイスラエルは利害が一致している。中東政治が構造変動を起こす中、イスラエルのネタニヤフ右派長期政権によるパレスチナ孤立化政策が、効果を上げていた。

トランプ政権は2018年8月31日、国連パレスチナ難民救済機関（UNRWA）への資金拠出を停止した。UNRWAはパレスチナ難民とその子孫を支援する国連機関だ。ヨルダン、シリア、レバノン、西岸、ガザ地区の難民キャンプを中心に暮らす530万人以上に医療や食料を支援し小中学校

を経営している。トランプ政権は続いて9月10日、ワシントンのパレスチナ自治政府代表部の閉鎖を発表した。アッバス自治政府議長の立場を弱体化させ、米イスラエル右派主導の「和平」案をパレスチナ側に押し付ける姿勢をあからさまにした。

オバマ外交を否定

アメリカの新大使館は、エルサレム中心部の旧市街と、約10キロ南方にあるヨルダン川西岸のパレスチナ自治区ベツレヘムのほぼ中間に開設された。1967年の第三次中東戦争前のイスラエル支配地域「西エルサレム」に、ぎりぎり収まっていた。旧ヨルダン支配地域である東エルサレムのアラブ人村スルバヘルは目と鼻の先だ。イスラエルの右派政党リクードのシャロン政権が2002年からイスラーム主義組織ハマスなどの自爆テロ防止を名目に建設を始めた分離壁（separation wall）がアラブ人地域を貫いている。

国際司法裁判所は2004年7月9日、分離壁は国際法違反との判断を示し、壁の撤去と住民への損害賠償をイスラエル政府に求める勧告的意見を出した。西岸での入植地建設も違法と判断した。イスラエル政府は「問題の根源であるパレスチナ人のテロに言及していない」と批判した。勧告的意見に拘束力はなく、シャロン政権は分離壁の建設を続けた¹⁰⁾。

トランプ大統領は大使館のエルサレム移転直前の2018年5月8日、オバマ政権の最大の外交的成果であるイランと米英独仏中露6カ国の2015年核合意「包括的共同作業計画（JCPOA）」からの離脱を表明した。トランプ外交の基本方針はオバマ外交の否定だ。

オバマ前大統領とネタニヤフ首相の関係は、米イスラエルの首脳関係としては近年異例なほどぎくしゃくしていた。憲法学者出身のオバマ大統領は軍事占領を認めない国際規範を重視する。パレスチナの苦境にも配慮し、西岸ユダヤ人入植地の拡大に難色を示した。一方、軍特殊部隊出身で入植地拡大を目指す大イスラエル主義者のネタニヤフ首相は2012年米大統領選挙で、オバマ大統領に挑んだ共和党のミット・ロムニー候補を公然と応援

した¹¹⁾。トランプ大統領の米大使館エルサレム移転は、イラン核合意離脱表明とともに、米国初のアフリカ系大統領オバマ氏の中東政策を全否定し、白人ナショナリストや福音派のシオニストを喜ばせた。

米大使館の開館セレモニーには、ネタニヤフ首相とサラ夫人をはじめイスラエル政府の要人が招かれた。アメリカ本国からは米投資銀行ゴールドマン・サックス出身でユダヤ系のスティーブン・ムニューシン財務長官、大統領の娘イヴァンカ・トランプ大統領顧問、娘婿のユダヤ教正統派ジャレッド・クシュナー大統領上級顧問、ラスベガスのカジノ王でトランプ陣営に巨額の政治献金をしてきたメガドナー、ユダヤ系のシェルドン・アデルソン（Sheldon Adelson）夫妻らユダヤ系右派の著名人が勢ぞろいした¹²⁾。

クシュナー上級顧問は、ニューヨーク近郊で不動産会社を経営する富豪の息子である。週刊誌ニューヨーク・オブザーバーを所有する保守的な正統派のユダヤ教徒だ。父方の祖父母は現在のベラルーシでナチス・ドイツのホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）を生き延び、アメリカへ移住した。イヴァンカ・トランプ顧問はクシュナー氏との結婚に際し、キリスト教プロテスタント系長老派教会の信徒から正統派ユダヤ教徒に改宗した。米史上初のユダヤ系大統領ファミリーだ。クシュナー顧問は父の代からネタニヤフ首相と親しく、家族ぐるみの交際がある。

ユダヤ系カジノ王

エルサレムでの開館式典で、最前列中央に妻と着席し満面の笑みを浮かべていたアデルソン氏は、米西部ネバダ州のラスベガス・サンズ・コーポレーション会長兼最高経営責任者（CEO）だった。米誌フォーブズの2014年億万長者番付で総資産約360億ドル（約3兆7,000億円）と推定され、世界で8番目の大金持ちにランクされた。

アデルソン会長は2016年大統領選挙戦で当初は共和党のマルコ・ルビオ上院議員（フロリダ州）を支持し、反ユダヤ主義的な白人ナショナリストにも人気のあるトランプ候補への支援に積極的ではなかった。しかし2016

年5月、トランプ候補の共和党候補指名が最有力視されると、ワシントン・ポスト紙にトランプ候補支持の意見を投稿し、同候補の指名獲得への流れを確実にした。トランプ候補の選挙戦に約20万ドルを献金して、民主党のヒラリー・クリントン候補に対するトランプ候補の僅差の逆転勝利に貢献した。2017年1月の大統領就任式には5万ドルを寄付した¹³⁾。

1991年に再婚した妻ミリアムはイスラエル生まれの依存症専門医で大イスラエル主義の信奉者。アデルソン氏は妻の政治思想に感化されたと言われる。トランプ大統領は2018年11月、ミリアム夫人に米市民の最高の榮譽である大統領自由勲章を授与した。アデルソン夫妻は米中間選挙が実施された同年、共和党に選挙資金約1億2,000万ドル提供していた。

米大使館の聖地エルサレム移転はアデルソン夫妻の長年の悲願だった。AP通信(2020年12月29日)によると、夫妻は2020年7月にテルアビブ北方の高級住宅地ヘルツェリアにある米大使公邸を約6,700万ドルで購入していた。購入の目的は、トランプ大統領退任後にバイデン新政権が米大使館をエルサレムからテルアビブに再移転するのを困難にするためとみられる。米国務省は報道機関に対し同年9月、公邸売却の事実を認めた。しかし購入者と価格などの詳細の公表は拒んでいた。

アデルソン会長は2007年、イスラエルで右派の無料紙イスラエル・ハヨムを創刊し、右派政党リクードが2009年の総選挙で躍進するのを助けた。同紙はネタニヤフ長期政権の維持に一役買っている。イスラエルの反ネタニヤフ勢力は、アメリカで安楽に暮らす大富豪がイスラエルの政治に強い影響力を持つのは不適切だと批判している。

アデルソン会長は2015年12月、ネバダ州の地方紙ラスベガス・レビュー・ジャーナルを買収して社主になった。報道・編集の自由への懸念から多くの記者や編集者が去った。同紙は2016年大統領選挙でトランプ候補支持を明確に主張したほぼ唯一の新聞とされる。2020年の選挙戦では、トランプ大統領に批判的な一般記事も散見されるものの、社説は民主党のバイデン候補を厳しく批判していた。

エルサレムに米大使館がオープンして約1か月後の2018年6月、シンガポールでトランプ大統領と金正恩・北朝鮮労働党委員長の初の首脳会談が行われた。会談前日の6月11日夜、金正恩委員長が訪れた豪華なリゾート施設マリーナ・ベイ・サンズはアデルソン会長が所有する。ネタニヤフ首相、クシュナー上級顧問、アデルソン会長は、イスラエルとアメリカの右派を結んでトランプ大統領を支えるユダヤ系実力者の三角形を成している¹⁴⁾。

アメリカのユダヤ系市民は人口の約2%弱だが、政治献金額では共和党ではアデルソン会長、民主党では投資家のジョージ・ソロス氏やブルームバーグ元ニューヨーク市長らが目立っている。アメリカ・ユダヤ人議会(America Jewish Congress = AJC)などの調査では、2012年の大統領選挙でユダヤ系の65%が民主党のオバマ大統領を支持し、24%が共和党のロムニー候補を支持した。2016年の大統領選挙では71%が民主党のクリントン候補に、24%がトランプ候補に投票したと推定されている。和平推進派のユダヤ系団体「J ストリート」が2016年11月8日の投票日に実施した出口調査では、クリントン候補に投票したユダヤ系有権者が70%、トランプ候補への投票が25%だった。J ストリートの2020年11月の米大統領選調査結果(標本800)では、民主党のジョー・バイデン候補への投票が77%、トランプ大統領への投票が21%だった¹⁵⁾。

米大使の入植地支援

エルサレムでの開館式典には、トランプ政権のジェイソン・グリーンブラット(Jason Greenblatt) 外交交渉特別代表、デーヴィッド・フリードマン(David Freedman) 駐イスラエル米大使も参列した。グリーンブラット特別代表とフリードマン大使は共にユダヤ教正統派の弁護士だ。2人は1990年代から、トランプ大統領がワンマンで不動産・レジャー関連の企業群を経営するトランプ・オーガニゼーションの法律顧問などを務めた。グリーンブラット特別代表はトランプ・オーガニゼーションの執行副社長

だった。両弁護士は2016年大統領選挙の直前に連名で、在イスラエル米大使館のエルサレム移転を訴える声明を発表した。

フリードマン大使はニューヨークの高名なラビ（ユダヤ教指導者）を父に持ち、ヘブライ語も堪能だ。トランプ氏が1990年代、ニュージャージー州アトランティック・シティのカジノ経営で巨額の負債を抱えた際、破産法専門の顧問弁護士を務めた。ヨルダン川西岸のユダヤ人入植地ベテル（別名バイトエル、「神の家」の意）に長年、巨額の資金援助を続けている。フリードマン氏の駐イスラエル大使起用には民主党系のユダヤ系団体や歴代の駐イスラエル大使らが反対した。

フリードマン大使と関係の深い西岸入植地ベテルを私は1997年1月に取材したことがある。前年の12月、クリスマスの起源ともいわれるユダヤ教のハヌカ（光の祭り）の最中、パレスチナ解放人民戦線（PFLP）のテロで妻と12歳の息子を射殺されたユダヤ教正統派の男性ヨエル・ツール氏の自宅を、喪が明けた当日に訪ね、聖書関連の本で書棚が埋まっている部屋でツールさんの心境を聞いた。妻と息子の葬儀にはネタニヤフ首相が参列していた。取材後、地中海を遠望する丘陵に広がるベテルを散策すると、首相の義弟（サラ夫人の弟）で入植者のハギ・ベンアルツィ氏と会った。彼は近くの丘の上に最近立てたというイスラエル国旗を指さし、「ここに新しい入植地をつくる。もちろんアラブの土地だったさ」と平然と言い放ち「国際的な批判はかわせる」と高笑いした¹⁶⁾。ユダヤ人社会は小規模だ。有力者同士はたいがいどこかで関係がある。子供のころから、家族ぐるみで、という話をよく聞く。日本で言えば、やや大きめの県の中小高の同窓生の関係に似ている印象だ。イスラエルのネタニヤフ首相やその親族と、大西洋を隔てたアメリカのフリードマン大使も、入植地を軸につながっている。

第2章 福音派シオニストの教会

ジョン・ヘイギー牧師

エルサレムでオープンした米大使館のセレモニーには「イスラエルのた

めのキリスト教徒連合」(Christians United for Israel = CUFI)の指導者ジョン・ヘイギー (John Hagee) 牧師も参加し演壇から祝福した。ヘイギー牧師は米テキサス州南部サンアントニオのプロテスタント系メガチャーチ (巨大教会) コーナーストーン教会の創設者で、2006年に CUFI を立ち上げた。現在の構成員数は約900万人。トランプ大統領の「岩盤支持者」を構成するキリスト教福音派の大物だ。CUFI がワシントンなどで開催する「イスラエルを敬う夜」(the Night to Honor Israel) には米政界、ビジネス界の有力者も集う。

CUFI はイスラエル支持の一点を掲げる初の全米キリスト教シオニスト組織で、ヘイギー牧師は聖霊 (the Holy Spirit) の降臨を重視するペンテコステ派 (Pentecostalists) だ。ペンテコステ派の運動は20世紀初頭に米中西部で始まり、今や全世界で約6億人ともいわれる福音派に浸透している。新約聖書の『使徒言行録』2章に依拠し、信者が聖霊に満たされ外国の言葉語りだす異言 (gift of tongues) で知られている。現代アメリカのキリスト教シオニズムにはペンテコステ派の影響が色濃い¹⁷⁾。

ティモシー・ウェーバーの『ハルマゲドンへの道：福音派はどのようにしてイスラエルの最良の友となったのか』(2004年、未邦訳)によると、ヘイギー牧師は世界福音テレビ (Global Evangelism Television = GET) の社長兼最高経営責任者 (CEO) でもある。GET は全米のテレビ・ラジオ局にコナーストーン教会の礼拝を放送している。伝道のためアメリカ国内はもとより世界各地を飛び回っている。牧師の伝道会は「エクソダスⅡ」と称し、旧ソ連在住ユダヤ人のイスラエル移住を支援した¹⁸⁾。エクソダスの名は、旧約聖書の預言者モーセがエジプトでファラオ (王) の隷属下にあった同胞ヘブライ人 (古代イスラエル人、後のユダヤ教徒) を「約束の地」「乳と蜜の流れる地」と呼ばれるカナン地方へ導こうとする『出エジプト』(Exodus) を踏まえている。ソ連が崩壊過程に入った1980年代末からの約20年間で、旧ソ連地域からユダヤ人 (教徒) と家族約100万人がイスラエルに移住した。

1991年に私が報道機関のモスクワ支局員として赴任した際に部屋を借りたアパートの家主は、これから一家でイスラエルに移住するという歯科医だった。近所のユダヤ系ではないロシア人に自分が裕福だと思われないようにとても気を使った、と話した。

諸民族の平等が看板だった社会主義大国ソ連の首都モスクワにも、ユダヤ人への偏見や差別は公然と残っていた。モスクワ支局でロシア語と英語の通訳兼取材助手を募集した際、ユダヤ系女性の採用にロシア人雇員が反対した。支局の気の良いロシア人男性運転手が「ユダヤ人は数十メートル離れていてもわかる」と紋切り型の反ユダヤ主義の言葉を口にした。神道関連の日本語の本も読めるインテリのロシア人男性ですら「ユダヤ人が混じるとロシア人の結束が揺らぐ」と反対した。私が「ユダヤ人には勉強で勝てないから嫉妬して差別するのだろう」と嫌味を言うと、プライドの高い彼が「ああ、ユダヤ人には勉強では勝てないね」とあっさり認めたのには驚いた。1994年にエルサレム支局に赴任すると、医師免許や博士号を持つロシアからのユダヤ系移民が職にあぶれていた。ヘイギー牧師の「エクソダスⅡ」は国際政治の機を見るに敏なプロジェクトだった。

洗礼でボーンアゲイン

ジョン・ヘイギー牧師が上級牧師を務める米南部テキサス州コーナーストーン教会のホームページによると、無宗派の福音主義教会で、教会員は2万2,000人を超える、という¹⁹⁾。2004年出版のティモシー・ウェーバーの本では教会員数は1万7,000人とされていた。敷地には教会堂をはじめ青少年センターなど10以上の建物が立ち並ぶ。三つの駐車場とピクニックエリアも備えている。ミュージック・イベント、スポーツ・クラブ、スペインを母語とする信徒やアフリカ系、アジア系の信徒のための集いが紹介され、非白人の教会員の存在を強調している。

アメリカの白人人口は減少を続け、テキサス州ではヒスパニックの人口が増えている。福音派は白人というイメージを薄め、カトリック主体のヒ

スパニックから福音派への宗派替えによる信者獲得を目指している。中南米では福音派が増えており、有力な信者供給源だ。

息子のマット・ヘイギーが主任牧師、ジョンの妻ダイアナが特別イベント調整、附属学校、女性信徒そして「イスラエルのためのキリスト教徒連合」(CUFI) 担当と紹介されている。マットの妻ケンダルは4人の子供の母で、若い女性教会員の能力開発、子を持つ母への人生指南が担当だ。

ホームページの「わたしたちの使命」には「すべての福音を、全世界と、すべての世代に」という言葉が直筆で掲げられている。「わたしたちの信仰」には、「イエス・キリストがすべての人間の身代わりになって死んだこと、イエスの復活、世界の審判のための再臨を信じる」「すべての人間は罪深い性質を持って生まれたが、キリストの十字架上の贖いが、罪の力からわたしたちを救済してくれると信じる」といったキリスト教の基本教義が記されている。

「聖書の言葉は神の靈感を受けた言葉であり、人類に向けた神の意思の完全な啓示であることを信じる。人類の諸事を司る聖書の絶対的權威を信じる」という文章には、聖書の言葉を文字通りに受け取る原理主義的な響きを感じられる。「十分の一税は聖書による命令であり、宗教的義務を定めた聖書の原則への従順の尺度である」は、教会の財政的基盤だ。「主はイエス・キリストの福音を分かち合うことですべての人々と国々に伝道するようわたしたちに命じられた」は福音主義の宣教の強調である。

入信の儀式である洗礼については「わたしたちは神の言葉に従って全身を水に浸す洗礼の儀式を信じる。イエス・キリストを個人的な救世主として受け入れた者は、公の信仰告白として水の洗礼を授けられるべきである」とされている。キリスト教信仰における個人の決断、回心(born-again)を告白し表明する重要性を示している。これも福音派の特徴である。使徒パウロによる新約聖書のパウロ書簡『ローマの信徒への手紙』6章4節に、

「私たちは、洗礼(バプテスマ)によってキリストと共に葬られ、その

死にあずかる者となりました。それは、キリストが父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるためです」

と記されている。洗礼は水の象徴によりイエス・キリストの死と復活に参加しキリスト教の信徒共同体の一員となる儀式とされる²⁰⁾。新約聖書の『ヨハネによる福音書』にイエスの言葉として次のように記されている²¹⁾。

「人は、新たに生まれ変わるのでなければ、神の国を見ることはできない (Except a man be born again, he cannot see the kingdom of God)」
(3:3)

ユダヤ国家は聖書の預言

ホームページの「イスラエルへの誓約」が、ヘイギー牧師とコーナーストーン教会のキリスト教シオニズムを端的に表している。

「わたしたちはユダヤ民族とイスラエル国家に関する『創世記』12章3節の約束を信じる。わたしたちはキリスト教徒がイスラエルとユダヤ民族を祝福し慰めるべきだと信じる。信者は反ユダヤ主義と闘い、イスラエルと神に選ばれた民族を守るために声を上げる聖書の義務がある」。

『創世記』12章3節とは「序章 聖書と外交」に引用した「あなた（ユダヤ民族：筆者補足）を祝福する人を私は祝福し、あなたを呪う人を私は呪う」を指す。神から族長アブラム（後にアブラハムに改名）への言葉は、何らかの史実を反映しているとしても4000年近い昔の出来事と推定されている。『創世記』のこの部分は、紀元前10-9世紀ごろの「ヤハウェ資料」を原典としている。ダビデ王とソロモン王の古代イスラエル統一王国にイスラエル12部族以外の外国人が加わる必要が生じたため、アブラハムを祝福する、すなわちイスラエル王国の權威を承認する、との条件で、外国人も受け入れる神学的思考が考案された、との指摘がある²²⁾。最終的に形が

整ったのは、イスラエルの祭司たちがバベル王キュロスの助力でバビロン捕囚からエルサレムに帰還しユダヤ教の第二神殿を再建した前6世紀後半以降の聖書編纂過程とみられる。

ヘイギー牧師は2千数百年前に編纂された古代の聖句を典拠に21世紀の国際政治でのイスラエル支援を訴える。ヘイギー牧師が強い親イスラエル思想を抱いたきっかけは1948年のイスラエル国家誕生だ。同年5月14日のイスラエル独立宣言と、トルーマン米大統領が宣言発布の9分後にイスラエルを国家承認したニュースは、当時8歳のヘイギー牧師の記憶に刻まれた。米ジョージ・ワシントン大学ローブ宗教的自由研究所のサムエル・ゴールドマン所長の著書『神の国：アメリカのキリスト教シオニズム』によると、ヘイギー牧師はテキサス州の自宅でイスラエル建国のニュースを聞いたとき「催眠術にかけられたように魅了された」と思い起こしている。「イスラエル国家の誕生により、聖書預言の正確さを確認した」のだ。こうした受け止め方をしたのは幼いヘイギー牧師だけではなかった。ロサンゼルスラジオ局はイスラエルの建国を「イエス・キリストの聖誕以来、最も重要な出来事」と伝えた²³⁾。

ユダヤ教徒を重視する聖書預言への信頼に加え、ナチス・ドイツのホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）と、聖書の無謬性やキリスト教徒の社会的責任を強調する新福音主義の台頭がヘイギー牧師を親イスラエルの積極的な活動に向かわせた。ヘイギー牧師はナチスによってユダヤ人が受けた苦難、反ユダヤ主義者ヒトラーの伝記などに強い影響を受けた。ヘイギー牧師が創立した「イスラエルのためのキリスト教徒連合（CUFI）幹部デヴィッド・ブログは「現代のキリスト教シオニストはナチスによるユダヤ人のジェノサイド（集団殺害）が頭を離れない」と述べている。

新福音主義は第二次大戦中の1942年に結成された全米福音派連合（the National Association of Evangelicals）の立場である。キリストへの個人的な信仰に加え、それまでのキリスト教原理主義（Christian fundamentalism）に乏しかった社会的責任を強調するのが特徴だ。「大統領の伝道師」と呼ば

れたビリー・グラハム (Billy Graham, 1918～2018) 牧師が代表的な人物である。グラハム師は1953年に大統領に就任した共和党のアイゼンハワー以来、歴代大統領の「霊的顧問 (spiritual adviser)」を務めたと言われる。同じ南部バプテストのビル・クリントン大統領 (民主党) の1993年の就任式で、グラハム師は大統領とゴア副大統領を祝福し、祈りをささげた。グラハム師は通常、政治的、党派的な発言を控えたが、イスラエルへの支持は一貫して彼の伝道の中心テーマだった。

右派ベギン首相に接近

ヘイギー牧師のイスラエル初訪問は1979年と比較的遅い。イスラエルでは1977年、シオニスト修正主義者メナヘム・ベギン率いる右派政党リクルドが建国以来初めて、政治的シオニスト主流派の中道左派労働党を破って政権を奪取した。ベギン首相は、カーター米大統領の仲介で1978年にエジプトのサダト大統領とキャンプデービッド和平合意を達成し、ノーベル平和賞も受賞した。カーター大統領は米福音派の最大宗派である南部バプテスト連合出身の敬虔な信者だが、民主党リベラルだった。人権を重視するカーター大統領は占領下のパレスチナ人の窮状とイスラエルの安全保障双方に強い関心を持ち、中東和平の推進を目指した。ベギン首相とサダト大統領は翌1979年にエジプト・イスラエル平和条約も締結した。ベギン首相は4度の中東戦争を戦った大国エジプトを敵に回す新たな中東戦争の不安に終止符を打った。

ベギン首相は、カーター政権の圧力で占領地シナイ半島のエジプト返還をのまされ、支持基盤である占領地の入植者はじめ右派・民族主義者の不興を買った。首相はその埋め合わせに1980年、エルサレム基本法を制定して第三次中東戦争の占領地東エルサレムを含む「統合エルサレム」を「ユダヤ人の永遠の都」と呼び、首都化を強行した。

1981年にはイラクの首都バグダッド南方のフランス製原子炉、通称オシラクを奇襲空爆して破壊し、国際的な非難を浴びた。1981年に就任した共

和党のレーガン大統領はグラハム師に傾倒するキリスト教福音派で親イスラエルだった。しかしオシラク原子炉の空爆・破壊は、アメリカから防衛目的に限定して供与されたばかりの最新鋭戦闘機 F-16 を、アメリカへの事前通告もなく使用し、国際査察下にある原子炉を破壊した大事件だった。

国連安全保障理事会はイスラエルによるオシラク原子炉空爆を「国連憲章と国際規範の明白な違反」と非難する決議487を採択した。レーガン政権も国際社会や産油国の中東諸国からの反発を考慮するほかなかった。棄権に回ることもできず決議に賛成した²⁴⁾。ヘイギー牧師はこの時、四面楚歌のイスラエルを支持するイベントを組織した。

ヘイギー牧師の神学は19世紀後半にイギリスから伝わったキリスト教プロテスタントの「ディスペンセーション主義」に沿っている。人類の歴史には神の計画（摂理）による時代区分があり、まもなく世界の終末と千年王国が到来するという黙示的終末論だ。ヘイギー牧師には『終わりの始まり、エルサレムの最後の夜明け、偽りの日』（Beginning of the End, Final Dawn over Jerusalem and Day of Deception, 2000）、『ダニエル書から最後の審判の日まで カウントダウンは始まった』（From Daniel to Doomsday: The Countdown Has Begun, 2000）、『アメリカへの攻撃 終末におけるニューヨーク、エルサレム、テロリズムの役割』（Attack on America: New York, Jerusalem, and the Role of Terrorism in the Last Days, 2001）、『エルサレム争奪戦』The Battle for Jerusalem, 2003）などの著書がある。聖書に基づき国際政治や自然現象の破局的展開を預言する書籍群である。

第3章 黙示的前千年王国終末論

ディスペンセーション主義

キリスト教シオニストによる聖地エルサレムへの強い思い入れと親イスラエルの思想と行動を理解するには、19世紀以降の英米プロテスタント福音派に特徴的なディスペンセーション主義（dispensationalism）と呼ばれる独特の黙示的終末論を知る必要がある。天啓的史観、摂理史観などと訳

されることがあるが、定着するには至っていないようだ。用語が定着しないのは、キリスト教徒でない一般の日本人には記憶する以前に、理解すること自体が困難な概念だからだろう。

キリスト教徒が迫害される不正義なこの世界の「終末」「終わりの時」(end-times)の後には「神の王国」「千年王国」(the Millennium)が訪れる。デイスペンセーション主義の千年王国論は、千年王国が実現する前に救世主(the Messiah, the Savior)であるイエスが再臨(the Second Coming)して破局的な終末のドラマが始まると考えるので、前千年王国論(Premillennialism)と呼ばれる。デイスペンセーション主義と前千年王国論はほぼ同じ内容として扱われることが多い。この分野の指導的歴史家ポール・ボイヤーの『時間が終わるとき 現代アメリカ文化の預言信仰』には摂理史観の前千年王国論(dispensational premillennialism)や前千年王国摂理史観体系(premillennial-dispensational system)といった用語が使われている。

前千年王国論に対し、人類社会の進歩で千年王国が実現し、その後に救い主イエスが再臨すると考える説を後千年王国論(Post-millennialism)と呼ぶ。千年王国が実現しているので、破局的な終末のドラマは不要だ。後千年王国論は社会進歩について楽観的で、リベラルな進歩主義の神学と重なる。逆に福音派に多い前千年王国論者は悲観的で、神の介入によって世界がいったん破局して終わり、一新されて「新しいエルサレム」(New Jerusalem)が天上から降りてくるのを期待する。

現代アメリカの福音派大衆やシオニストに浸透しているデイスペンセーション主義、あるいは黙示的前千年王国終末論は19世紀前半、イギリスの福音派ジョン・ダービーが聖書の黙示文書の預言を独自に解釈し、19世紀後半にアメリカで広めた。ダービーの説は、聖書を字義通りに解釈する原理主義的なキリスト教福音派に受け入れられていった。デイスペンセーション主義は、啓蒙的理性を重視する近代主義者のリベラルな神学に対抗する保守派の神学である。

ダービーの影響を受けた福音派は「聖地エルサレムにユダヤ教徒が再び集まるのはイエス・キリスト再臨の前兆だ」と考える。1948年のユダヤ国家イスラエル建国は、ユダヤ教徒の聖地再定住と見なされる。福音派はイスラエル建国により、前千年王国的な聖書預言の解釈の正確さが実証されたと歓喜した。

イスラエルは1967年、国家存亡の危機とされた第三次中東戦争で電撃的な大勝利をおさめた。ヨルダンが支配していた東エルサレムのユダヤ教聖地「西の壁」（「嘆きの壁」）や「神殿の丘」（the Temple Mount）、聖書の舞台ユダヤ、サマリアと重なるヨルダン川西岸、さらにはシリア領ゴラン高原とエジプト領シナイ半島も占領し、支配地域は一挙に4倍に拡大した。福音派のシオニストは歴史への「神の介入」（divine intervention）「奇蹟」とイスラエルの勝利を讃えた。開戦から停戦までわずか6日間だったことからイスラエルが六日戦争と呼ぶ1967年の中東戦争は、アメリカ国内で福音派を増やし、福音派がアメリカの中東外交に影響力を強めるきっかけになった。

ディスペンセーション主義は、旧約聖書の『ダニエル書』や新約聖書の『ヨハネの黙示録』をはじめとする聖書の黙示思想に基づく。人類の歴史が神の計画、すなわち摂理（dispensation）によって幾つかの時代に区分されていると考える。歴史の最終段階で救世主（メシア）であるイエスが聖地エルサレムに再臨し、敬虔なキリスト教徒は突然、天国に上昇し、空中で救い主イエスと出会う歓喜と恍惚を体験する。これはラブチャー（the Rapture）と呼ばれる。神に選ばれた人々はその後の破局的な終末の事件を免れることができる。

神に選ばれず「取り残された人々」（the left behind）は、反キリスト（Antichrist）の支配、諸国間の戦争、地震、飢饉、迫害といった7年間に及ぶ大いなる苦難（Tribulation）に見舞われ、多くの人々が命を落とす。善と悪の最終決戦ハルマゲドン（Armageddon）で、イエスが率いる善の軍隊が勝利する。この過程でユダヤ教徒の大半は死亡するが、生き残ったユ

ダヤ教徒はついにイエスを神の子と受け入れ、キリスト教に改宗する。古い世界は滅び、イエスが支配する千年王国の新世界が出現する。キリスト教の起源であるユダヤ教の信徒も悔い改めてキリスト教に改宗することで、キリスト教の福音宣教は完成する。

黙示的終末論のドラマは、福音派の大衆にアピールする。最も商業的成功を収めた本に、全米のスーパーの書店で飛ぶように売れたと言われるハル・リンゼイ（Hal Lindsey）の啓蒙書『今は亡き偉大な惑星地球』（The Late Great Planet Earth）がある。1970年に出版され1978年までに900万部、1990年までの20年間に2,800万部が売れたという。ティム・ラヘイ（Tim LaHaye）とジェリー・ジェンキンズ（Jerry Jenkins）の共著による16巻の近未来預言小説『レフト・ビハインド』（Left Behind）シリーズは、日本語を含む各国語版を合わせると6,000万部以上売れたとされる。黙示的終末論は、福音派教会の説教やケーブルテレビ、書籍、映画やビデオ、ゲームなどでもアメリカの大衆文化に浸透している。黙示録（アポカリプス）、善と悪の最終戦争（ハルマゲドン）、千年王国（ミレニウム）といった聖書の言葉が日本語でもよく知られているのはアメリカのポップカルチャーの影響だろう²⁵⁾。

黙示的終末論の起源

黙示（revelation）とは、この世界の隠された真理、奥義、秘義が、神に選ばれた預言者に暗黙に、あるいは象徴的に、示されることだ。聖書の中でそれを記したものが黙示録（the Apocalypse）である。旧約聖書は、(1) 律法（トーラー、モーセ五書）と総称される『創世記』『出エジプト記』『レビ記』『民数記』『申命記』、(2) 預言書（ネビーイーム）と総称される『イザヤ書』『エレミヤ書』『エゼキエル書』の3大預言者の書と『ホセア書』など12小預言者の書、(3) 諸書（ケトゥービーム）と総称される『詩編』『ヨブ記』『箴言』『コヘレトの言葉』『エステル記』『ダニエル書』などの3つに分けられる。

このうち紀元前2世紀に成立した『ダニエル書』(The Book of Daniel)が黙示文学の原型的文書である。『岩波 キリスト教辞典』の「黙示思想」の項目に、紀元前後のユダヤ・キリスト教関連思想の専門家である大貫隆・東大名誉教授は次のように記している。

「『黙示』とは歴史と宇宙万物の奥義に関する解き明かし(ギリシャ語で apokalypsis)のこと。この意味での黙示にこだわり続けた黙示思想は、古代末期の地中海世界に展開した様々な思想運動の中でも、歴史的輪郭が最も描きにくい現象の一つであるが、特に重要なのはユダヤ教黙示思想である。これは前5－2世紀の後期預言運動から派生し、前2世紀のダニエル書をもって本格的に成立した。

後期預言運動とは、旧約聖書の『ゼカリヤ書』、『ヨエル書』3－4章、『イザヤ書』34－35章、同24－27章などを指す。ユダヤ人指導層はバビロン捕囚(前597年、前587年)でユダヤ教の第一神殿(ソロモン王の神殿)が破壊されてバビロンに連れ去られた後、前538年にペルシャ王キュロスの庇護でエルサレムに帰還した。だが新バビロニアやペルシャ帝国に続き、アレクサンドロス大王、その後継王朝プトレマイオス朝エジプトやセレウコス朝シリアの抗争に翻弄され、外国王朝の支配下に置かれた。どちらも多神教のヘレニスト帝国である。」

大貫氏の『終末論の系譜 初期ユダヤ教からグノーシスまで』などによると、『ダニエル書』は紀元前165年ごろの成立と推定されている。エルサレムを支配するプトレマイオス朝シリアのアンティオコス4世(アンティオコス・エピファネス)は前169年、バビロン捕囚から帰還後に再建されたエルサレムのユダヤ教第二神殿内に、ギリシャの至高神ゼウス像を設置した。

アンティオコス4世はさらに前167年、ユダヤ教徒の割礼や安息日を禁止した。ユダヤ教の律法で禁じられた豚肉を食べるように強要し、神殿内で異教のゼウス神の祭儀を強制した。違反者は死罪に処された。ユダヤ教の上級祭司ら貴族・支配層の間ではヘレニズム化が進んでいた。神殿の冒涇

とエリート層の「裏切り」に怒った地方の下級祭司ユダが反乱を起こし、マカバイ戦争が勃発した。反乱軍は前164年にエルサレム神殿を奪還した。

『ダニエル書』は多神教の帝国にユダヤ教徒が迫害されてマカバイ戦争が起きた時期に書かれた。古代のイスラエルはコスモポリタン（世界市民的）なヘレニズム文明の流入に圧倒されつつあった。『ダニエル書』は民族宗教的一神教のヘブライズムによるヘレニズムへの抵抗の書と言えよう。黙示文学の先駆けと言われ『ダニエル書』に影響を与えた旧約『エゼキエル書』はバビロン捕囚の初期に書かれた。いずれもユダヤ民族が国家消滅の危機に瀕していた時代である。イスラエルはメソポタミアやエジプトの大帝国に囲まれた小国にすぎなかった。黙示文学や終末論は、危機の時代に生まれる被抑圧者の地下文学と言われる。迫害される者の慰めとして機能した。

『ダニエル書』は12章から成る。アラム語で書かれた7章「四頭の獣の幻」（日本聖書協会共同訳『聖書』の小見出し、以下同様）、ヘブライ語の8章「雄羊と雄山羊の幻」、同9章「七十週の預言」、同10章「終わりの日の幻」など謎めいた、暗号のような象徴的、寓意的な詩的言語が詰まっている。『ダニエル書』は21世紀の今日まで、ダービーを含むその後の終末預言の解釈に決定的な影響を与えた。ユダヤ教の伝統では諸書に区分される『ダニエル書』は、キリスト教では預言書とされることが多い。

11, 12章はヘブライ語で終末の破局的な戦争が預言されている。旧約聖書全体の中で死者の復活（the resurrection of the dead）への希望が初めて現れた部分として有名な12章2－4節を引用する。

「地の塵となって眠る人々の中から、多くの者が目覚める。ある者は永遠の命へと、またある者はそしりと永遠のとがめへと。悟りある者たちは大空の光のように輝き、多くの人々を義に導いた者たちは、星のようにとこしえに光り輝く。ダニエルよ、あなたは終わりの時までこの言葉を秘密にし、その書物を封印せよ。多くの人々は探求して知識を増やす。」

異教の王朝と闘って殉教したユダヤ教徒は死からよみがえって永遠の命を与えられる。逆にユダヤ教徒を迫害する者たちには永遠の懲罰が待っている。指弾される者たちの中には、異教の王朝支配に迎合してヘレニスト化したユダヤ教徒も、民族の裏切り者として含まれている。「地の塵となって眠る人々」は『創世記』の、

「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった」(2:7)

「あなたは塵だから、塵に帰る」(3:19)

を想起させる。仏教の無常観にも通じる死生観だ。砂や土埃が風に舞う中東の砂漠を知る者には違和感のない生と死の観念である。引用した聖句の末尾は、ダニエルが黙示された奥義を世界の終末まで秘密にするよう命じられ、後の人々が探求することが予告される。黙示思想と聖書預言のその後の歴史もそのような軌跡をたどった。

キリスト教の黙示思想

新約聖書4福音書の中で最古の『マルコによる福音書』は後70年のローマ軍によるエルサレム第二神殿破壊の後に書かれたとみられている。歴史的事実としてのイエスは後30年ごろイスラエル北部のガリラヤ湖畔で「福音」(the gospel)を説き「神の国」(the Kingdom of God)運動を始めた。

「(洗礼者)ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」(1:14-15)。

マルコ福音書冒頭のイエスのこの言葉からは終末待望が切迫感をもって伝わってくる。神の国の秘義が預言者に啓示されたとする黙示思想は、ユ

ダヤ教を起源とするキリスト教の中核に位置している。マルコの「…人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来る…」(8:38)は、『ダニエル書』の「…見よ、人の子のような者が天の雲に乗ってきて…」(7:13)と酷似する。大貫氏は「ダニエル書の終末論はイエスの『神の国』のイメージ・ネットワークと大きく重なっている」と指摘している²⁶⁾。

新約聖書の末尾を飾る『ヨハネの黙示録』(The Revelation of John)は、キリスト教徒が迫害されたローマの第7代皇帝ドミティアヌスの治世(紀元81-96年)の後、エーゲ海のパトモス島に住むヨハネが書いたと推定されている。20章から最終22章まで「千年間の支配」「サタンの敗北」「最後の裁き」「新しい天と新しい地」「新しいエルサレム」「キリストの再臨」についてのイメージ豊かな劇的描写が並ぶ。

聖書預言で善と悪の世界最終戦争を意味するハルマゲドンは『ヨハネの黙示録』の、

「汚れた三つの霊は、ヘブライ語で『ハルマゲドン』と呼ばれるところに王たちを集めた」(16:16)

から取られた。これは現在もイスラエル北部にある古戦場メギドの丘を指す。全聖書中でハルマゲドンという言葉が現れるのはこの箇所だけだ。

悪魔的な存在を示す数字「666」は『ヨハネの黙示録』の、

「理解ある者は、獣の数字の持つ意味を考えるがよい。数字は人間を指している。そしてその数字は六百六十六である。」(13:18)

から取られている。福音派の座右の書『スコフィールド聖書』の「666」は註で、『ダニエル書』の「ネブカドネツアル王は金の像を造った。高さは六十アンマ、幅は六アンマであった。」(3:1) 参照としている。ネブカドネツアル王はエルサレムの第一神殿を破壊した新バビロニアの王、金の像は
480 (158)

ユダヤ教が忌避する偶像だ²⁷⁾。

旧約のユダヤ教黙示文書の代表が『ダニエル書』、新約のキリスト教黙示思想の集大成が『ヨハネの黙示録』だ。ニュートンが『ダニエル書』と『ヨハネの黙示録』の2文書を選んで論考を書いたのは彼の関心が宇宙の真理を密かに示す黙示録にあったからだろう。

ジョン・ネルソン・ダービー

現代アメリカのキリスト教福音派シオニストの終末預言に大きな影響を与えたジョン・ネルソン・ダービー (John Nelson Darby, 1800–82年) の預言解釈も『ダニエル書』『ヨハネの黙示録』など聖書の黙示的聖句に基づいている。ロンドン生まれのダービーはダブリンのトリニティ・コレッジ卒業後、1825年にアイルランドの英国教会系小教区の牧師補となり、死の床にある信者の魂の救いやカトリック農民の改宗に務めた。しかしほどなく国教会の位階的な組織構造や王権とのつながりに反発し、辞職した。1831年、階層組織や国家とのつながりを否定する「プリマス・プレスレン」(the Plymouth Brethren) に参加し、イエス・キリストの再臨を強調する黙示的な前千年王国終末論を説いた。1849年、プリマス・プレスレンともたもとを分かち、厳格な「排他的プレスレン」(the Exclusive Brethren) を立ち上げた。1959年から頻繁にアメリカへ渡り、デイスペンセーション主義の終末論を広めた。

ダービーの終末論の特徴は、天から再臨する救世主イエスと、復活した死者と共に突然雲に包まれて引き上げられる敬虔なキリスト教徒との空中での恍惚的な出会い「ラプチャー」(the Rapture) である。これは新約聖書のパウロ書簡『テサロニケの信徒への手紙 一』(The First Letter of Paul to the Thessalonians) を典拠としている。

「合図の号令と、大天使の声と、神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から下って来られます。すると、キリストにあって死んだ人たちが

まず復活し、続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に出会います。こうして、私たちはいつまでも主と共にいることになります。ですから、これらの言葉をもって互いに慰め合いなさい。」(4:16-18)

「人々が『平和だ。安全だ』と言っているときに、ちょうど妊婦に産みの苦しみを訪れるように、突如として滅びが襲ってくるのです。決して逃れることはできません。」(5:3)

『テサロニケの信徒への手紙 一』5章は、イエスの再臨と世界の終末が突然訪れることを強調した後、「目を覚まし、身を慎んでいましょう」と訴える。同章12節以降の結びには、

「…心から愛し敬いなさい。互いに平和に過ごしなさい」

「秩序を乱す者を戒めなさい。気落ちしている者を励ましなさい。弱い者を助けなさい。すべての人に対して寛大でありなさい。誰も、悪をもって悪に報いることのないように気を付けなさい。」

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」

など心とませる倫理的な呼びかけの言葉が並ぶ。

再臨したイエスと空中で出会い救われるキリスト教徒の至福、救われなかった不信心者に襲いかかる大いなる苦難の恐怖、その日までキリスト教会の信仰共同体で仲間と育む愛の教え、これらの対比の鮮やかさがダービー版黙示的前千年王国終末論の魅力なのだろう。5章はその後、

「預言を軽んじてはなりません」

という戒めの一言を挟み、末尾はパウロ書簡らしく「私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなた方と共にあるように」で終わる。

ダービーは、大英帝国やアメリカを神の「約束の地」「新しいエルサレム」に見立てる英米で当時流布していた愛国主義的な神学を否定し、終末

におけるユダヤ教徒の役割を重視した。紀元1世紀、エルサレムのユダヤ教徒はイエスを「神の子」として受け入れることを拒み、占領者ローマによる十字架刑に手を貸した。しかしユダヤ教徒を選民とした神の約束、神とユダヤ教徒の契約（旧約）は永遠で変わらないと考える。救世主の再臨、終末、神が支配する千年王国の出現という聖書の預言は、神の選民であるユダヤ教徒が古代の故郷イスラエルの地に国家と神殿を再建することで成就に近づく、と説いた。

ポール・ボイヤーは、ダービーの預言解釈に独創的なものは何一つない、と言う。十字軍に参加し『黙示録註解』3部作を著したイタリアの歴史神学者フィオーレのヨアキム（Joachim of Fiore, 1135頃-1202）などから伝わるさまざまな預言作家の説から影響を受けており、ラブチャーですら英北米植民地マサチューセッツの会衆派牧師インクリース・マザー（Increase Mother, 1631-1723年）に見いだされると指摘した。セイラム魔女裁判を批判したことで有名なマザーには『イスラエルの救済の不思議…』という著書がある。

イギリスでは19世紀前半、聖書預言のさまざまな解釈が現れた。ダービーが有名になったのは、彼のデイスペンセーション主義が神学的な体系性を備えていたことに加え、講演活動による自説の普及にも力を入れ、特にアメリカで保守的な福音派の指導層に受け入れられたことが大きい。ダービーは1859年から1877年までに少なくとも6回渡米し、プロテスタントのバプテスト派（浸礼派）や長老派（Presbyterian）に歓迎された。デイスペンセーション主義の著名な長老派牧師ジェームズ・ブルックス（James Brooks）のミズーリ州セントルイスの教会や、再臨や悔い改めを強調した1870年代の第三次信仰復興運動（revival movement）指導者ドワイト・ムーディ（Dwight Moody）のシカゴの教会に招かれて説教する機会を得た。ダービーの預言解釈がアメリカで広まった理由には、聖職者の階層組織や国家と宗教のつながりを排除する彼の神学が、旧世界の階級社会や国家主義を嫌う新世界アメリカの宗教風土になじんだ点も指摘できよう。

聖書預言の基盤は、聖書の逐字的な解釈だ。人間理性による合理主義との調和を重視しない保守的、神権的な神学である。一方、リベラルな神学は、天地創造を否定した進化論などの自然科学や産業革命に対応し、信仰と理性の調整を図っていた。ドイツでは聖書の無謬性にメスを入れる歴史的批判的な研究が始まっていた。こうした動きに危機感を覚えていたアメリカの福音派にとって、ダービーの保守的で体系的な終末論は力強い援軍だった。

スコフィールド聖書

ダービーのデイスペンセーション主義を現代に至るまでアメリカに根付かせたのは、米中西部ミシガン州生まれの聖書研究者サイラス・スコフィールド (Cyrus I. Scofield, 1843–1921年) の『スコフィールド・レファレンス・バイブル キング・ジェームズ版』(the Scofield Reference Bible King James Version) だ。デイスペンセーション主義の黙示的終末論の立場から一貫して編集された同聖書は1909年にオックスフォード大学から出版されて以来、版を重ね1,000万部以上売れたと言われる。スコフィールド聖書には関連する聖句を示した膨大な註と彼自身の解説が満載されている。福音派にとっては、リベラル神学に対抗する保守的な神学の典拠となる聖句を豊富に提供する「武器」である。

スコフィールドはプロテスタント監督派 (Episcopalian) の家庭に生まれ、幼くして母を亡くし、南北戦争でテネシー州の部隊などに従軍した後、ケンタッキー州、ミズーリ州、カンザス州などを転々とした。結婚し29歳でカンザス州司法長官になった経歴を見ると、有能で野心的な青年だったと思われる。しかし汚職疑惑で失職し、アルコールに溺れて妻と娘を遺棄し離婚されるなど波乱の前半生を送った。やがて福音派キリスト教徒に改宗し、福音派の大物ムーディに見い出され、ダービーをアメリカで歓待したブルックスにデイスペンセーション主義の神学を学んだ。

デイスペンセーション主義による神と人類の関係を規定する時代は7つ

に区分される。米宗教史家シドニー・アールストロムは神と人類との契約の順序に従って以下のように整理している。現代はイエス・キリストの十字架刑による死から、再臨による千年王国到来までの間に挟まれた6番目の恩寵の契約の時代に当たる。

- (1) 無垢 (Innocency) : エデン契約 (the Edenic covenant)。墮罪 (the Fall) 前のアダムと。
- (2) 良心 (Conscience) : アダム契約 (the Adamic covenant)。楽園追放後。
- (3) 人間の統治 (Human Government) : ノア契約 (the Noahic covenant)。洪水 (the Deluge) 後。
- (4) 約束 (Promise) : アブラハム契約 (the Abrahamic covenant)。神の選民イスラエルとのみ。他のすべての民族は人間の統治にとどまる。
- (5) 法 (Law) : モーセ契約 (the Mosaic covenant)。ユダヤ教徒へのイエスの聖なる奉仕からユダヤ教徒と異邦人 (非ユダヤ教徒) が共に関与したイエスの磔刑 (the crucifixion) までのイスラエルと。
- (6) 恩寵 (Grace) : 恩寵の契約 (the covenant of grace)。キリスト再臨までの、キリストにおけるユダヤ教徒と異邦人個人への。
- (7) 時が満ちること (the Fullness of Time) あるいは王国 (the Kingdom) : 千年王国 (the Millennium)。キリストがイスラエルのダビデ王朝を再興し千年間支配する²⁸⁾。

ダービーのデイスペンセーション主義、黙示的前千年王国終末論はスコフィールド聖書を通して、現代アメリカ福音派のキリスト教シオニズムに独特の政治神学と聖書の想像力を提供し続けている。

第2章で取り上げた「イスラエルのためのキリスト教徒連合」(CUFI)のヘイギー牧師はじめ福音派の指導者は、ダービーやスコフィールド由来の黙示的終末論を現代の国際政治に重ね、イスラエルの建国や支配地域拡大を支持する。パレスチナ和平に反対するイスラエル右派は福音派の支援は歓迎するが、ユダヤ教徒のキリスト教改宗を密かに視野に置く福音派への警戒心もある。一神教の元祖ユダヤ教から見れば、後発のキリスト教は

カルト的な異端の分派にすぎない。現実的なイスラエル人の大多数は、キリスト教福音派を奇妙な人々だと感じているようだが、自分を讃えてくれる相手を拒む理由はない。しかも超大国アメリカの権力中枢に親イスラエル政策を働きかけてくれる。イスラエルは国益や実利を優先し、福音派を厚遇してその影響力を利用し続けている。

お わ り に

2020年11月の米大統領選挙は、共和党のトランプ大統領が民主党のバイデン候補に敗れ、政権交代が確定した。バイデン次期大統領は国務長官にオバマ政権の国務副長官アントニー・プリンケン氏を指名した。熱心な福音派だったポンペオ国務長官に替わってアメリカ外交の舵を取るプリンケン氏はニューヨーク生まれのユダヤ系。プリンケン氏の母親の再婚相手はやはりユダヤ系の著名な国際弁護士サムエル・ピサル氏だ。ピサル氏はアウシュビッツ絶滅収容所の数少ない生き残りの一人である。

アウシュビッツ解放50周年の1995年1月、私はエルサレムのキングデーヴィッド・ホテルで、ピサル氏にインタビューした。父母や妹、ポーランドの親類はナチス・ドイツのホロコーストで全員殺された。故郷の小学校の児童約500人のうち生き残ったのはピサル少年一人だけだったという。母親についての話が特に印象に残った。

「子供や女性、老人はすぐ殺された。私は13歳の時も、偽って18歳の青年を装った。収容所行きの家畜用貨車に乗せられる前、少しでも大人に見えるよう、母がだぶだぶのズボンをはかせてくれた。収容所では小さな失敗も直ちに死を意味したので、決して失敗しないよう絶えず全神経を集中した」²⁹⁾

プリンケン次期国務長官は義父からもホロコーストの体験談を聞かされているに違いない。プリンケン氏は国際的な人権侵害を重視すると予想されている。パレスチナ自治政府に対する前政権の極端な冷遇政策は是正されるだろう。一方、ユダヤ国家イスラエルが「主権国家として生存する権

利」(the right to exist as a sovereign nation) も譲れない一線だ。イスラエルの安全保障はアメリカが超党派で支援する外交政策である。バイデン次期大統領はエルサレムの米大使館をテルアビブに再移転することはないと早々と言明した³⁰⁾。

トランプ大統領の敗北確定後も、トランプ支持者の中には選挙の投開票に不正があったと考えている人が少なくない。激戦州ペンシルベニアはじめ数州でトランプ陣営の提訴が証拠の欠如などを理由に裁判所に次々と退けられ、再集計しバイデン候補の票がかえって増える結果が出ても、敗北の事実を否定し現実を受け入れようとしない。不正がなければ大統領が再選されていたはずだと信じている。

この社会心理はキリスト再臨 (advent) の日を特定して預言し外れたときの熱烈な信者の反応と酷似している。アメリカ宗教史上最も有名な預言失敗は、1843年初めボストンを拠点とする洗礼派の牧師ウィリアム・ミラー (William Miller) が『ダニエル書』に基づく独自の計算結果として、キリスト再臨が1843年3月21日から1844年3月21日の間に起きると預言し、外れたことだ。預言成就日の特定は避けるという伝統を破ったミラーは、ニューイングランドで多くの再臨待望の信者を集め、ミラー運動 (the Millerite movement) と呼ばれる社会現象となった³¹⁾。ニューヨークや中西部に広がり、大西洋を越えイギリスにも伝播した。1843年3月21日になったがキリストは再臨しなかった。1844年3月21日も何事もなく過ぎていった。ミラー説の信奉者は嘲笑的となった。だが、かれらの多くは預言の真実性への確信をかえって強めたと報告されている。1849年のミラー没後も信者の女性ホワイト夫人が霊的指導者となり、再臨待望とユダヤ教の土曜安息日の厳守を特徴とする「セヴンスデー・アドヴェンティスト」教団を創始し、現在に至っている。

社会心理学者レオン・フェスティンガーは『預言が外れた時：世界の破滅を預言した近代集団に関する社会的、心理学的研究』(1956年)でミラー運動のプロセスを研究し、翌年『認知的不協和の理論』で、人間は信仰を

含む自分の認知と矛盾する事実と直面して「認知的不協和 (cognitive dissonance)」を生じると、不協和を増やす情報を避け、不協和を減らそうと行動する、という理論を提唱した。トランプ大統領の岩盤支持者にキリスト教福音派が多いことも考え合わせると、興味深い視点である³²⁾。

本稿で取り上げた終末、千年王国といった黙示思想の研究は、ユダヤ・キリスト教などの宗教を超える対象にも適用できる可能性がある。アメリカの宗教史・文化史家ポール・ボーヤーは、
「黙示録的な世界観の基盤には、人類の諸経験が超越的目標へ向けて進んでいるという前提があり、西洋文化の歴史観を深く形づくった。カール・マルクスの『資本論』は、社会混乱や革命暴力の連続的サイクルから無階級社会のユートピア (a classless utopia) が現れるヴィジョンを持つことから、西洋思想の伝統の中で最後にして最大の黙示録であると主張する人々も実際にいる」と指摘している³³⁾。

私は少年のころにマルクス主義的な政治思想や価値意識に強い影響を受けたおそらく最後の世代に属する。現代の理想主義的、急進的、革命主義的な政治思想と黙示思想の構造的・機能的な類似性にも、関心を持たずにはいられない。

註

- 1) マーティン・ギルバート著『イスラエル全史 (上)』57頁
- 2) 船津靖『パレスチナー聖地の紛争』46-48頁
- 3) 東エルサレムを含むエルサレムの人口は約90万人 (2018年)。ユダヤ入植地を含む周辺人口は100万人を超える。イスラエル中央統計局が2020年に発表した同国の人口は919万人でユダヤ系74%, アラブ系21%
- 4) Michael D'Antonio and Peter Eisner, *The Shadow President: The Truth About Mike Pence*, 2018, pp. 169-187
- 5) 本稿の聖書からの引用は『聖書 聖書協会共同訳 旧約聖書続編付き』による。
- 6) Isaac Newton, *Observations upon the Prophecies of Daniel, and the Apocalypse of St. John*, Isaac Newton Classics, 2020. フランク・E. マニユエル著、竹本健訳『ニュートンの宗教』(法政大学出版局, 2007年)

- 7) “Trump Recognizes Jerusalem as Israel’s Capital and Orders U.S. Embassy to Move” *New York Times*, Dec. 6, 2017
- 8) イスラエルの初代首相ベングリオンは、英パレスチナ委任統治終了前日の1948年5月14日、テルアビブからイスラエルの独立宣言を発した。エルサレムからの宣言でないのは、新国家樹立の法的基盤となる前年の国連パレスチナ分割決議がエルサレムを国際管理下に置くと規定していたためだ。ユダヤ教聖地を含む通称「東エルサレム」をアラブ側が実効支配していた現実の制約もあった。
- 9) “President Donald Jr. Trump Keeps His Promise To Open U.S. Embassy in Jerusalem, Israel”, White House, May 14, 2018
- 10) 船津靖, 231–236頁
- 11) 船津靖「再考迫られる米の対イスラエル政策——和平案否定ネタニヤフの勝利」(『外交 Vo..31』, 都市出版) 2015年5月
- 12) “Jerusalem Embassy Is a Victory for Trump, and a Complication for Middle East Peace”, *New York Times*, May 14, 2018
- 13) “Sheldon Adelson: I endorse Donald Trump for president” *Washington Post*, May 13, 2016. “Sheldon Adelson, Donors to G.O.P. and Israel, Is Dead at 87”, *New York Times*, January 12.
- 14) アデルソン会長は、ソフトバンクグループの孫正義会長兼社長と親しいことでも知られる。安倍政権主導で2016年12月、それまで違法だったカジノを含む統合型リゾート (IR) を推進する法律が制定されたのを受け、アデルソン会長は大阪市や横浜市での IR 施設開業を目指したが、新型コロナウイルス感染症拡大により2020年5月、日本進出を断念した。「米カジノが日本進出に執念」(『日本経済新聞』2017年10月11日), 「IRのラスベガス・サンズ、日本進出を断念」(『日本経済新聞』2020年5月3日)。トランプ大統領の2016年11月の当選直後に孫正義会長と安倍晋三首相がニューヨークのトランプタワーを相次いで訪問して世界的なニュースになった。背景にはユダヤ系カジノ王アデルソン会長の存在があった。アデルソン氏は2021年1月11日、米カリフォルニア州の自宅で悪性リンパ腫のため87歳で死去した。トランプ米大統領やネタニヤフ・イスラエル首相はじめ多くの要人が追悼のコメントを発表した。
- 15) J Street National Jewish Voters Survey, November 3, 2020. 船津靖「2016年米大統領選挙とユダヤ系アメリカ人」(『修道法学』第39巻第12号, 2017年) 241–247頁
- 16) 船津靖, 連載企画(下)「ヘブロン撤退——和平への遠い道のり いえぬテロの苦しみ, 入植地拡大の懸念も」共同通信, 1997年1月23日配信。
- 17) Hummel, *Covenant Brothers*, pp. 185–187
- 18) Timothy P. Weber, *on the Road to Armageddon: How Evangelicals Became Israel’s*

Best Friend, pp. 225–227

- 19) <https://www.sacornestone.org/>
- 20) 百瀬文晃「洗礼」『岩波 キリスト教辞典』p. 692
- 21) *The Old Scofield Study Bible, King James Version* (1917 notes), Oxford University Press, 1996 本稿の聖書本文の英訳は福音派が重視する『スコフィールド版聖書』採用のジェームズ英国王版訳による。
- 22) 加藤隆『旧約聖書の誕生』29–30頁, 100–107頁
- 23) Samuel Goldman, *God's Country: Christian Zionism in America* p. 151
- 24) 「イスラエル右派ベギン首相の核ドクトリンと米福音派レーガン大統領のシオニズム」(『修道法学』第42巻第1号, 2019年) 22–27頁
- 25) Paul Boyer, *When Time Shall Be No More: Prophecy Belief in Modern American Culture*. Harvard University Press, 1992, pp. 1–112
- 26) 大貫隆『終末論の系譜』53–54頁
- 27) James Tabor, “Ancient Jewish and Early Christian Millennialism” *The Oxford Handbook of Millennialism*, 2011, Bill Arnold, “Old Testament Eschatology and the Rise of Apocalypticism” *The Oxford Handbook of Eschatology*, 2008
- 28) Glenn Shuck, “Christian Dispensationalism”, *The Oxford Handbook of Millennialism*, pp. 515–528, Weber, pp. 20–23
- 29) 船津靖「『戦後50年』インタビュー：想像絶する人間の行為, 家族, 友人みな犠牲, アウシュビッツの生存者」(『共同通信』1995年1月25日配信)
- 30) “Joe Biden-Foreign Policy”, *New York Times*, Feb. 6, 2020
- 31) ミラーの再臨日預言の計算は『ダニエル書』の「二千三百の夕と朝が過ぎ去るまでに, 聖所は回復する」(8:14)を基礎にしている。再臨日預言の戒めの根拠は『マタイによる福音書』の「その日, その時は, 誰も知らない。天使たちも子も知らない。ただ, 父だけがご存知である。人の子が来るのは, ノアの時と同じだからである」(24:36)や『使徒言行録』の「イエスは言われた。『父がご自分の権威をもってお定めになった時や時期は, あなたがたの知るところではない』」(1:7)など。
- 32) Leon Festinger, Henry Riecken, Stanly Schacheter, *When Prophecy Fails: A Social and Psychological Study of a Modern Group that Predicted the Destruction of the World*, Martino Publishing, 2009, pp. 3–32
- 33) Boyer, p. 45 宗教を「アヘン」と否定したマルクスはユダヤ教ラビ(宗教指導者)を輩出した家系に生まれた。父は世俗的でユダヤ教からプロイセンのキリスト教会へ改宗・改名した。

参 考 文 献

- Ariel, Yaakov. 2013. *An Unusual Relationship: Evangelical Christians and Jews*. New York University Press.
- Boyer, Paul. 1992. *When Time Shall Be No More: Prophecy Belief in Modern American Culture*. Harvard University Press.
- Burge, Gary. 2003. *Whose Land? Whose Promise?: What Christians Are Not Told About Israel and the Palestinians*. Paternoster Press.
- D' Antonio, Michael and Eisner, Peter. 2018. *The Shadow President: The Truth About Mike Pence*, St. Martin's Press.
- Fitzgerald, Frances. 2017. *The Evangelicals: the Struggle to Shape America*. Simon & Shuster Paperbacks.
- Festinger, Leon, 2009, *When Prophecy Fails: A Social and Psychological Study of a Modern Group that Predicted the Destruction of the World*, Martino Publishing
- Goldman, Samuel. 2018. *God's Country: Christian Zionism in America*. University of Pennsylvania Press.
- Hagee, John. 2006. *Jerusalem Countdown: A Prelude to War*. Front Line.
- Halsell, Grace. 1986. *Prophecy and Politics: The Secret Alliance Between Israel and the U.S. Christian Right*. Chicago Review Press.
- Hummel, Daniel, 2019 *Covenant Brothers: Evangelicals, Jews, and U.S.-Israel Relations*, University of Pennsylvania Press.
- Judis, John. 2014. *Genesis: Truman, American Jews, and the Origins of the Arab-Israeli Conflict*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Lindsey, Hal. 1970. *The Late Great Planet Earth*. Zondervan.
- Merkley, Paul. 2004. *American Presidents, Religion, and Israel: The Heirs of Cyrus*. Prager Publishers.
- Scofield, Cyrus. 1996. *The Old Scofield Study Bible, King James Version*. Oxford University Press.
- Sizer, Stephen. 2004. *Christian Zionism: Road-map to Armageddon?* Inter-Varsity Press.
- Spector, Stephen. 2009. *Evangelicals and Israel: The Story of American Christian Zionism*. Oxford University Press.
- Walls, Jerry. edi. 2008. *The Oxford Handbook of Eschatology*. Oxford University Press.
- Weber, Timothy. 2004. *on the Road to Armageddon: How Evangelicals Became Israel's Best Friend*. Baker Academy.
- Wessinger, Catharine. 2011. *The Oxford Handbook of Millennialism*. Oxford University Press.
- Encyclopaedia Judaica*, 2nd edition, 2007

Encyclopedia of Religion, 2nd edition, 2005

Political Dictionary of the State of Israel, 1993

Dictionary of American History, 3rd edition, 2003

New Dictionary of the History of Ideas

New York Times, Haaretz, Christianity Today

Pew Research Center Fact Tank

マーク・アムスタッツ著、加藤万里子訳『エヴァンジェリカルズ アメリカ外交を動かすキリスト教福音主義』（太田出版、2014年）

大貫隆『終末論の系譜 初期ユダヤ教からグノーシスまで』（筑摩書房、2019年）

加藤隆『旧約聖書の誕生』（筑摩書房、2008年）

マーティン・ギルバート、千本健一郎訳『イスラエル全史（上）（下）』（朝日新聞社、2008年）

久保文明編『アメリカ外交の諸潮流——リベラルから保守まで——』（日本国際問題研究所、2007年）

スーザン・ジョージ著、森田成也・大橋定晴・中村好孝訳『アメリカは、キリスト教原理主義者・新保守主義に、いかに乗っ取られたのか？』（作品社、2008年）

秦剛平『マカベア戦記上下 ユダヤの栄光と凋落』（京都大学学術出版会、2015、2016年）、秦剛平訳『七十人訳ギリシャ語聖書 ダニエル書』

グレース・ハルセル著、越智道雄訳『核戦争を待望する人々 聖書根本主義派潜入記』（朝日新聞社、1989年）

船津靖『パレスチナ 聖地の紛争』（中公新書、2011年）

松本佐保『熱狂する「神の国」 アメリカ 大統領とキリスト教』（文春新書、2016年）

ロバート・バットナム、デヴィッド・キャンベル著、芝内康文訳『アメリカの恩寵 宗教は社会をいかに分かち、結びつけるのか』（柏書房、2019年）

フランク・E. マニユエル著、竹本健訳『ニュートンの宗教』（法政大学出版局、2007年）

森本あんり『アメリカ・キリスト教史 理念によって建てられた国の軌跡』（新教出版社、2006年）、『キリスト教でたどるアメリカ史』（角川ソフィア文庫、2019年）

ヤコヴ・ラブキン著、菅野賢治訳『イスラエルとは何か』（平凡社新書、2012年）

D.H. ロレンス著、福田恒存訳『黙示録論』（ちくま学芸文庫、2004年）

『岩波 キリスト教辞典』（2002年）

『社会学事典』（弘文堂、1994年）

日本聖書協会『聖書 聖書協会共同訳 旧約聖書続編付き』（2018年）

The U.S. Embassy Move to Jerusalem and Evangelicals' Apocalyptic Eschatology

Yasushi Funatsu

U.S. President Donald Trump formally recognized Jerusalem as Israel's capital on Dec. 2017. He moved the American embassy in Tel Aviv to the holy city of Jerusalem May 14, next year, exactly on the 70th anniversary of the Declaration of independence of the Jewish State. At the opening ceremony of the embassy, John Hagee, the founder of the Christians United for Israel (CUFI), a powerful Christian Zionist's lobby, was seen together with Jewish big names such as Ivanka Trump, Jared Kushner and Sheldon Adelson, a casino mogul and Republican mega donor.

The U.S. embassy move to Jerusalem was distinctively pro-Israel and deviated from previous U.S. Presidents' diplomacy who aimed to be a fair mediator between the Israelis and the Palestinians in the Mideast peace process. In 2019, the Trump administration recognized Israeli sovereignty of the Syrian Golan Heights and indicated a U.S. acceptance of Israel's future annexation of Jewish settlements in the occupied West Bank. The international community including the United Nations Security Council except the U.S., saw these moves as a violation of international law.

Trump's pro-Israel foreign policies were designed to strengthen support from white evangelical voters. Most of them are pro-Israel Christian Zionists. Influential leaders such as pastor Hagee have propagated a dispensationalism; apocalyptic premillennial eschatology, originated from the prophecies of ancient biblical texts, including "The Book of Daniel" and

“Revelation”. Dispensationalism was systematically presented by British pastor John Darby and spread across America after the Civil War. His biblical interpretation was characterized by dramatic events such as Rapture, Antichrist, the Tribulations, Armageddon, Conversion of the Jews, and the Millennium in New Jerusalem.

This eschatological scenario is hard to understand by ordinary non-Christian Japanese readers. Most Japanese might see them a mere products of fictional imagination. However, apocalypticism and millennialism are main pillars of Christianity together with the teachings of love. Apocalyptic millennialism tends to be passionately embraced by people suffering from hardships and miseries in this world. It is a universal socio-psychological phenomenon which can be observed in various radically idealistic movements.